



二松學舎大学附属図書館

# 季報

No. 100

2017(平成 29)年 11 月

Quarterly Report

- P2 ~ 3 「季報」100号に寄せて 水戸英則 菅原淳子 土屋 茂
- P4 ~ 6 歴代館長からのメッセージ  
雨海博洋 大谷光男 佐藤 保 山崎正伸 林謙太郎  
磯 水絵 谷口 貢
- P7 「季報」編集者より 小町邦明 高林由美子 小林憲二
- P8 ~ 9 附属図書館のあゆみ
- P10 平成 29 年度 大学資料展示室特別展のご案内
- P11 ~ 12 本学教職員著書紹介

### 「季報」100号を記念して

学校法人二松學舎 理事長 水戸 英則

「季報」が1977年7月の創刊以来、この度第100号の発行となり、先ずは、この間の編集諸氏のこれまでの努力とその労をたたえたいと思います。「季報」は当時の図書館長であった石川梅次郎教授が、図書館とその利用者である学生・教員等利用者を結びつける広報誌の必要性を説かれ、発行に至ったものであると聞いています。(図書館 小林憲二氏談)

図書館は、大学における学生の学習や大学が行う高等教育及び学術研究活動全般を支える学術情報基盤の役割を有しており、大学の教育研究にとって不可欠な機関の一つであるといえます。ここで、原点に立ち返って図書館の機能について、文部科学省の大学図書館審議会(注)の議論を引用しながら、本学図書館との比較でみていきましょう。

第一の機能は「学習支援及び教育活動への関与」という点です。昨今は、学生が主体的に学ぶ学習の重要性が認識され、その支援を行うことが図書館にも求められています。本学でも整備を進めたラーニング・コモンズや図書館職員等によるレファレンスサービス等学習支援は、この機能に応える方策です。次に、教育活動への直接関与としては、「ICTリテラシー教育」です。すなわち、学生が卒業後生涯を通して、自ら学習し、判断し、行動するための各種情報やデータ等正確な情報を得るため、PCやタブレット等各種ツールを使いこなし、データや情報を収集・分析し、その結果を表現・発信する能力を身に付けることが求められます。本教育は、新入生に対する初年次教育や基礎ゼミの授業として開講することや図書館職員が教員を兼任し、直接授業を担当するなど図書館が補助的に取り組むことも一案です。またe-Learningへの取り組みについても同様に本学図書館において、その教材作成への関与、教材の整理・提供といった面での貢献が期待されるところです。

二番目の機能は「研究活動に即した支援と知の生産への貢献」があげられます。基本的には学術雑誌、図書、その他研究を進めるうえで必要な情報へのアクセスを確保することであり、研究プロセスそのものに密着し、次の研究活動へと活かせるようなサイクルを形成するための基盤を提供し、構築することによって、知の生産に貢献することが重要です。また人文科学分野でのDigital Humanities(人文科学系研究者間の論文になる前の学術情報を蓄積・共有)の構築、運用等図書館での今後の検討が期待されるところです。

三番目は「蔵書のコレクション構築と適切なナビゲーション」です。図書、その他資料の収集、蓄積、提供といった大学図書館の基本的役割を考えると、学術図書中心のコレクション構築機能は重要ですが、この前提としては、あくまで教員や学生など利用者のニーズを第一に踏まえることが必要です。学術図書のコレクション構築においても、教員の流動性が高まる中で、図書館職員の果たす役割が大きくなってきていると言えますし、学生のニーズを踏まえた蔵書のラインアップを検討することは有益です。

最後の機能は、現在国公立大学間で推奨されている機関共同利用の観点です。他機関・地域等との連携・コンソーシアムの組成及び国際対応です。先ずは学内の多様な組織、例えば情報系センター、教育支援・キャリア各センターなどとの連携のほか学外の関連機関との連携も重要です。さらに日本語の電子図書などに関しては、外注先の丸善雄松堂との連携をさらに進めていく必要があり、その他文書館、博物館、美術館との連携も視野に入れることが考えられます。また、現在柏キャンパスで行っている一般市民に対する開放をはじめ九段・柏両図書館での展示会の実施など、本学が保有する情報資源や人材を活用して、社会・地域連携にさらに積極的に取り組む必要があります。また大学の国際競争力向上の観点から、本学の海外提携校等の大学図書館等との連携も視野に入れることが考えられます。

大学図書館のごく最近の傾向では、図書館にカフェを併設するとか、グローバル教育の一環として日本語禁止エリアを設ける、話し合いをしやすいように可動式の机を配置する、学術図書のみならず漫画、新書、文庫コーナーを設けるなど、要は、「学生の居場所としての機能」を図書館の役割として検討する先が多く、注目すべき動きだと考えられます。

最後に1977年7月発行の「季報」創刊号には、当時の理事長・学長であった浦野匡彦舎長が、「大学の図書館は、自ら学び、自ら考え、自ら研究する学生のために存在する知識の宝庫である。万卷の書も、利用する学生の活用如何によって、宝ともなり、紙切れともなる・・・」と続け、「要は、燃える向学心と飽くなき研究心を持ち続けることである。」と締めています。正に今現在、大学改革の主要テーマである教育の質的改善の重要な要件の一つとして、「学生の主体的な学修の必要性」が挙げられており、この「Liaison」としての図書館の重要性はいささかも変化していないと思われます。

(注) 大学図書館の整備とその機能について(科学技術・学術審議会、学術情報基盤作業部会)

---

---

## 常に知的好奇心を

学長 菅原 淳子 (2006年4月～2008年3月)

---

---

人類は、洋の東西を問わず 4000～6000 年以上も前に文字を生み出し、文字による記録や書物を残してきた。やがてそれらを収集・蓄積し、保存する場が誕生する。歴史上有名なのは紀元前 3 世紀のアレキサンドリアの図書館であるが、19 世紀にメソポタミアで発掘された遺跡から楔形文字を記した粘土板が大量に出土し、この紀元前 7 世紀の遺跡は図書館だったと考えられている。日本では 8 世紀に入ると、宮廷のために資料を集めて保存し国史を編纂する図書寮や、個人で蔵書を集める芸亭が作られるようになった。

時代は下って、中国で発明された印刷術はヨーロッパに伝わり、15 世紀の印刷術の発達は書物を一般の人々に開放することになった。近代に至るまでどの国でも識字率は極めて低かったものの、人々が文字に親しむにつれて、文字を書くことは考えるためになくてはならない技術になったのである。17 世紀フランスの思想家パスカルは、「しっかり書けるということはしっかり考えられるということ」という言葉を残している。限られた人のためにあった図書館が、人々に開かれたものになるのは、公共図書館が成立する 19 世紀後半であった。

さて、近年日本を含めて世界ではロボットや AI (人工知能) の研究が進んでいる。深層学習という新しい技術によって、AI は膨大なデータを解析することで、自ら「学習」を深められるようになった。しかし AI とは Artificial Intelligence であり、Artificial Intellectual とは言わない。つまり、intelligence (知能) であって、intellectual (知性) ではないのである。知性は唯一人間に備わったものであり、書物を読んだり深く考えたりすることでさらに豊かなものとなる。自らが知らないことを自覚できるのは人間、飽くなき知的欲求、知的好奇心を持つことができるのも人間だけであろう。この欲求や好奇心を満たしてくれる場所の一つが、人間の知的所産がたまっている図書館なのである。

---

---

## 図書館の現状と課題 (1)

附属図書館長 土屋 茂 (2015年4月～)  
国際政治経済学部教授

---

---

二松學舎大学附属図書館には、多数の問題がある。その最も重大かつ深刻な問題は施設の狭さである。これを解決するための理想的な案としては、九段キャンパスに適切な広さ・空間を持ち、研究室を含めた独立の図書館を建設することである。24 時間・365 日利用可能な図書館にすることができる。しかし、これは夢のまた夢であり、実現可能性はほとんどないと思われる。したがって、現実的な対応策を考えなくてはならない。それは次回に記そうと思う。今回は現状を簡単に説明したい。

二松學舎大学附属図書館は、九段キャンパスに「九段図書館」・柏キャンパスに「柏図書館」の 2 館から成り立っている。平成 29 年 3 月現在、図書約 35 万 5 千冊を有するほか、電子書籍・雑誌・電子ジャーナル・データベース・視聴覚・新聞等を多数所蔵している。柏図書館には本学卒業生である「水木かおるコーナー」を設置し、九段図書館には、2 号館に「ラーニング・コモンズ」の施設があり、1 号館地下 3 階に「大学資料展示室」を設けている。また数多くの貴重品を所蔵するほか「横溝正史旧蔵資料」の活用も毎年のように行われている。

2 館に分かれている不便さを補うために「資料の取り寄せ」制度を設け、柏図書館の本等を九段図書館で借りることができるサービスを提供している。28 年度には柏から九段に配送された図書・雑誌等は 1300 冊を超え、文献複写は 400 件以上となっている。九段図書館における年間利用者数は 10 万名以上であり、ラーニング・コモンズの利用者も増加している。地域への開放も可能な限り積極的に行っており、千代田区民に対しては 10 大学で共同実施し、千葉県東葛地区においても 7 大学図書館で相互利用を実施している。今年度は共立女子大学・短期大学と協定を結び、学生の相互利用を可能にした。(次回に続く)

## 〇歴代館長からのメッセージ

### 生がいのあった図書館長時代

元学長・名誉教授 雨海 博洋 (1988年4月～1989年3月)

かつて、図書館長は、学長と並ぶ重要な存在であった。大体年功を積んだ者が選ばれたものであった。当時、その道のベテランであった田中伸教授が、体調をそこね、急に退任された。その後任に当てられたのが私であった。経験の浅い私にとって重荷であった。それなりにがんばらねばと思った。

そこで、新しい経営方針を考えた。

まず、二松出身の作家、文人の研究に資する、文献資料を集め、そのコーナーを作ろうとした。

次に図書館の活用、展示であった。活用の範囲を大学のみならず広く社会に利用してもらおうと考えた。

手のかかることであったが、館員は積極的に協力してくれた。全く生がいのある時代であった。

### 図書館長就任時

名誉教授 大谷 光男 (1992年4月～1994年3月)

平成4年4月に、私は高山節也先生(副館長)を仰いで図書館長に就任した。この年は沼南校舎2号館の隣に、二学部にわたる図書館(5号館)を建設することになり、5月16日に地鎮祭を挙行了。かくて面積1850㎡の図書館の建設が決定した。

一方、千代田校舎は書庫の蔵書も増え、本年度より3階から出入りするようになった。むしろ書庫に接続していることからみれば、かえって3階からの利用が適していた。

当時、図書館の基本的な問題は機械化が進み、閲覧カードを除き、検索機の導入、パソコンの設備、またマイクロフィルム利用によるマイクロリーダーの設置場所という3点であった。今日からでは想像のつかぬ設備の考案であった。

また、大学図書館の地域市民への公開ということもあって、千代田区内の大学図書館・千代田区立図書館との蔵書の貸出への準備も急ぐことであった。この方は従来未経験であったので、心配による大きな問題で、種々と討議が行なわれた。内容は第三者への図書館入館証の発行の条件、書籍の貸出の範囲などである。とにかく、図書館が二館に分かれることによって、心配事が増えたが、幸いに館員一同、一丸となって図書館の運営に協力され、問題を逐一解くことに成功した。従って、教員による図書委員会の実質的な問題のみを議題として、たとえば図書の購入も予算内に限って選択し、会議はすべて短時間で終えることにした。

私は今日いまだに、研究の課題を抱えているので、時折、千代田の図書館を――沼南図書館の蔵書も取り寄せるなど――我儘一杯に利用させていただいているが、その設備、蔵書数は、かつてと比べると隔世の感がある。創立140周年を迎え、その発展を心より慶んでいる。



図書館 (柏5号館)



ラーニング・コモンズ前の二本の松(九段2号館)

---

---

## リリーフ館長

元理事長・顧問 佐藤 保 (2002年10月～2004年3月)

---

---

私が山田安之理事長から「附属図書館長を命ずる」との辞令の交付を受けたのは、平成14年10月1日、同年の4月に二松學舎大学大学院教員として着任した半年後のことである。任期は「平成16年3月31日まで」と記されていた。

任期が一年半と短かった理由は、私の館長就任が、平成14年6月に急逝された山崎正之館長の残任期間をひき継ぐものであったからである。いわばリリーフ登板である。実は、故山崎館長のリリーフは、私だけではなかった。当時文学部長であった針原孝之教授が図書館長職を兼務された期間が三ヶ月ほどあるので、厳密に言えば針原教授がリリーフの一番手、私は番手リリーフとして針原教授の後に登板したことになる。ただ、針原教授の図書館長職兼務の状態が少々長びいた印象があるのは、当時の特別な事情が影響していたせいかもしれない。

特別な事情とはすなわち、平成14年4月に始まった九段キャンパスの全面的なリニューアル工事である。当時、九段キャンパスは完全に使用をやめて工事を進めると同時に、柏キャンパスと湯島聖堂に分散して学部と大学院の教育・研究は遅滞なく持続させるというきわめて厳しい事態の中で、図書館長の後任探しはやや先送りされたのではなかろうか。

九段の改築工事は急ピッチで進み、平成16年3月に新しい1号館・2号館が竣工した。この間、リリーフ館長の私は、図書館業務に関するかぎり、まったく頭を使う必要はなかった。おそらく、すでに私のリリーフ登板以前に、故山崎館長や大上恒雄図書館事務部長等を中心に、改築に伴う図書館業務は細部に至るまですっかり検討がなされていたからに違いない。

一方、館長としての私の仕事は、新しい図書館に設置が決まった「大学資料展示室」の開室準備に向けられた。平成15年の春に準備委員会を立ち上げると、集中的に会合を重ねて、平成16年5月に2号館の1階に展示室がオープンした。現在の展示室は内容をより充実させて、1号館の地下3階に移されている。

---

---

## 九段図書館の今昔

文学部国文学科教授 山崎 正伸 (2004年4月～2006年3月)

---

---

昭和44年4月の入学式で、当時の学長の加藤常賢先生が、二松學舎には日本一の図書館がある。一つは閉架式の国会図書館、もう一つは開架式で買うことも出来る古書店街というお話しをされた。当時の図書館は図書室だった。2号館が建って図書室が2フロアになった。その後、柏に大学図書館らしい図書館が建った。九段校舎の立て替えの時、紀要類を処分する話になった。せっかく成田修一・平田恵の両氏の雑誌紀要蔵書目録がある。他大学はこれだけのものは所蔵していないと、当時の事務局長、後の理事長大山徳高先輩にお願いして、柏の附属高校の校舎に、除湿設備を設置して保管してもらった。

新九段校舎が完成して、まさかの図書館長となった。一番困ったことは、立派な書架だった。これでは本が思うように入らない。全部スチールにして欲しいと頑張ったが、理事長室で大声だけが空しく響いた。当時の図書館部長大上恒雄先輩に辞めるということだけは言わないでと、諭された。お蔭で二年間が終了できた。1つ1万円とかの棚が増えたが、イメージとは違った。後に、学生が利用しやすい形になってほっとしている。

柏図書館の本の利用が困った。こちらは、事務局で、毎日の定期便に図書館の本を入れて運ぶということが、内緒で了承された。今は、サービスとして行われている。もう一つが、国際政治経済学部の3・4年次生も九段校舎で授業となった。蔵書及び予算比率を学生数でと言ったが、数字で割り切れない。国際政治経済学部の予算を多めにした。にもかかわらず、ロシア語の本がないと訴えられた。思い出すいろいろあるが、楽しく面白い2年間だった。

時代が変わって、多くの雑誌紀要類が、インターネットで検索、ダウンロードまでできるようになった。柏保管の紀要類も、今後、考えなければならぬだろう。

( )内の年月は図書館長在任期間

---

---

## 利用者あつての…… 文学部国文学科教授 林 謙太郎 (2008年4月～2009年3月)

---

---

在任一年ではありましたが、不慣れ未熟な私どもをしっかりと支えていただいたことに、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

在任中の一番の思い出は、本学が横溝正史所蔵資料を購入した御縁で、御子息の亮一氏をお迎えしての講演会開催に加わったことでした。父正史氏のエピソードはもちろんのこと、御専門のクラシック音楽から日本の古典芸能にわたっての文化的価値についてのお話をうかがいました。

さて、図書館の存在意義といわれたら、利用促進と知の拠点になることであろうと思います。欧米の大学では、24時間開いている所もあるということです。日本でもオールナイトとまではいかないまでも、ほぼ年中無休という所は確かに存在しています。学生のライフスタイルに合わせて、いつでも利用できる便宜を図ることは、利用促進の上からも必要なことと思われます。とはいえ、休祭日に開館したはいいが、利用者ゼロということも残念ながら起こりうる可能性大です。まあそれでもよいではありませんか。また、使い勝手のよい図書館にするためには、書籍の配置箇所等、不断にアンケートをとる努力も求められます。

一方で、貸出の延滞者数もかなりの数に上ります。ある大学では一日につき、100円徴収しているそうです。ルール違反のものにはペナルティーは利用者に平等に科すべきです。

先に述べましたように、図書館は大学にとっては知の拠点となる所です。本学にかかわるすべてのステークホルダーにとって気持ちよく利用できるようにすることが肝要です。

このような機会を与えていただいたので、勝手ながら、思いつくままを書かせていただきました。

---

---

## 未来の図書館へ 副学長 文学部国文学科教授 磯 水絵 (2011年5月～2013年3月)

---

---

筆者が館長に就任した翌年に、漸く開館時刻が8時40分に早まった。ほんの20分のことではあるが、授業開始時刻と同じでは、ゼミ発表等で確認したいことがあった場合に不便をかこっていた学生、そして教員にとっても、それはたいへんな変革であり、進歩であった。先日、8時40分にはフライング気味なのは知りながら図書館に行ってみたが、開館という立て看板にうれしさがこみ上げた。我々が色々確認したい場合には電子辞書では不足である。

したがって、未来の図書館に望むことは、24時間年中開館である。時間のたっぷりある年末年始にこそ開けておいて頂きたい。青春時代の年末年始には、家族単位の団欒に背を向けて、一人、書物の間に体ごと身を預けておきたかった。あとは、テーブルに餅と蜜柑があれば充分であった。筆者の指導教授は、子育て期には図書館通いもままならないからと、手元に書物を置くことを勧めてくれた。お蔭で研究の手を止めることなく、子育ても全うできた。それでも、新しい辞書を購入することを迷う年になった。いつまで使えるだろうかと思うと、減価償却まで命が続くかを考えてしまう。これからは、せいぜい図書館を使って研究を続け、ついでに若い学生の息吹を浴びて切磋琢磨していくことにしよう。

「何だ？あの婆さん」と言われながら、世にはばかっていくのは楽しいことではないか！二松では、書物に疲れたら、散歩に行ける場所がたくさんある。北の丸もいい、皇居の東御苑もいい。今日は近代美術館にしようか、サントリーにしようか、それとも三井記念美術館か……。二松の立地にはどこの大学も敵わない。

---

---

## 大学図書館の役割 文学部国文学科教授 谷口 貢 (2013年4月～2015年3月)

---

---

私が図書館長を務めさせていただいたのは、平成25年4月からの2年間であった。今から振り返ると、図書館の丸善さんへの業務委託がはじまったばかりであり、電子書籍の本格的な導入が進められ、さらに大学資料展示室を1号館の地下3階へ移して、2号館にラーニング・コモンズを開設するなど、図書館が新しいかたちを模索する節目に当たっていた。また柏市で開催されるビブリオ・バトル(知的書評合戦)の学内選抜を、オープン・キャンパスにあわせて実施したのも、新しい試みであった。

図書館には実に多様な業務があり、図書委員会をはじめ大学資料展示室運営委員会、横溝正史旧蔵資料運営委員会等も主催している。館長に就くまでは、図書館を外側から漠然と眺めていただけなので、大学図書館の仕事を内側から知ることが出来たのは、大変有意義な経験であった。私が館長として適任であったかどうかかわからないが、心がけたのは図書館のスタッフの方々が働きやすい環境を整えることと、発生したトラブルについては速やかに、かつ適切に対応することであった。館長職をなんとか無事務め上げることが出来たのは、有能なスタッフの方々に支えられたお陰であったといえる。

本学には、九段および柏の両図書館に30数万冊の蔵書がある。今後、紙媒体の書籍と電子書籍等との関係がどうなっていくのかわからないが、大学の図書館が学問や研究における知の拠り所であり続けることは変わらないのではないだろうか。そのために、図書館は地道な努力を重ねているので、多くの学生諸君が図書館の膨大な蔵書を積極的に活用してほしいと願っている。

## ○「季報」編集者より

### 季節の一報

事務局長 小町 邦明

『季報』はやはり季節感がないとね。」先輩図書館員の言葉が身に染みて閲覧カウンターで必死に編集したことが懐かしいです。

私が「季報」を担当したのは、今から28年前で就職して8年目のことです。当時の「季報」編集は図書館員の中では敬遠されがちで、厄介な仕事が回ってきたと正直思いました。やるからにはと紙面を一新し、毎回自分で撮った写真を表紙に掲載することにしました。これがまた大変で、季節感のある写真を用意するために、日曜日撮影に行ったことを覚えています。

「季報」の創刊号に当時の故石川梅次郎館長が「お互いに良い交流の場として『季報』を出すことにした。」と記述されています。この考えは今も変わらず「季報」には様々な情報が盛り込まれ、図書館と教員や学生との交流の場として役立っています。「季報」は創刊から現在まで何度もリニューアルされ廃刊になる危機もありましたが、いつの時代も編集担当の苦勞が忍ばれます。今後も「季報」が末永く続くことに期待します。継続は力なり。

### 「季報」作成の思い出

キャリアセンター 事務部長 高林由美子

「季報」100号発行おめでとうございます。

私が編集のお手伝いをしていたのは、はるか昔の「季報」初期の時代です。すべての作業に人の手が必要で、時間に追われていた記憶しかありません。

その頃の私は、やる気はあっても知識がない新人職員でした。上司はそんな私に一から編集の仕事を教えてくださいました。

「季報」には毎号特集ページが組まれており、このネタ探しに苦勞していました。見かねた先輩方がアイデアをくださり、なんとか発行に漕ぎ着けていました。

資料収集のため千代田区役所に出向いたり、国会図書館に通ったりしたことは、よい思い出として残っています。

その時の経験は何事にも代え難く、現在の仕事への取組みの基礎になっています。

今では一読者として、「季報」の発行を毎回楽しみに待っています。

### 「季報」の原点とは

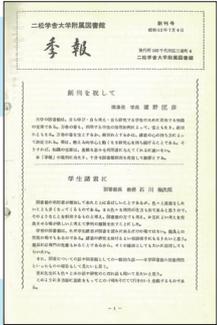
元図書館事務部副部長 小林 憲二

「季報」の創刊号発行は、昭和52年7月なので、100号の発行が、平成29年9月となると、40年間で、100号となり、「季報」と云う誌名には、合致しない計算になるが、これは、66号と67号の間に、10年間の休刊期間がある為である。「季報」の原点は、当時の図書館長である、石川梅次郎先生の巻頭言「学生諸君に」に集約されている。先生は其中で、図書館と利用者が、お互いにより考えを交流させる場、としての「季報」発行を提言している。

創刊号には、教員による書籍の紹介、レファレンスコーナー（伊勢物語）、司書講習の案内、図書館の開館日、コピーサービス、他図書館資料の利用について、購入希望図書申請等、の記事が掲載されていて、100号の中にも形は変わってはいるが、交流の場としての「季報」の原点が継続されていると思われる。

『四庫全書』『四部叢刊』がCD-ROMやDVD-ROMで利用でき、『国歌大観』がWeb検索され、閲覧机に大部の資料を積み上げて学習する利用者の姿は、余り見られなくなってしまったが、講義の予習・復習に取り組む利用者の姿は、変わらぬ図書館の原風景となっている。

# 二松學舎大学附属図書館年表

西暦年(元号)	大学の主な出来事	図書館(九段)	図書館(柏)
1877(明治10)	漢学塾二松學舎創立		
1928(昭和3)	二松學舎専門学校設立	◆専門学校に図書室開室(創立者三島中洲旧蔵資料を主としていた)	 <p>九段校舎旧書庫[~平成13年まで]</p>
1949(昭和24)	二松學舎専門学校が二松學舎大学に移行、文学部国文学科・中国文学科開設	◆大学附属図書館設置(約4万7千冊の蔵書)	
1965(昭和40)		◆『二松學舎大学図書館図書目録』発行	
1966(昭和41)	文学研究科開設	◆5階建て新校舎の2階に図書館開館	
1970(昭和45)		◆惇齋文庫[那智左典舎長の旧蔵図書(和漢籍)]受入れ ◆守田文庫[守田藤之助教授の旧蔵図書]受入れ ◆崑山文庫[崑山久尚名譽教授の旧蔵図書(主に朝鮮語関係資料)]受入れ ◆『増加図書目録一号』発行	
1974(昭和49)		◆加曾利文庫[加曾利見氏(専門学校16回卒)の旧蔵図書]受入れ	 <p>「季報」創刊号</p>
1977(昭和52)	創立100周年記念式典挙行	◆「季報」創刊 ◆竹清馬越文庫[馬越旺輔顧問の旧蔵図書(江戸時代の写本・版本)]受入れ ◆小島文庫[小島康見氏の旧蔵図書]受入れ	
1978(昭和53)	創立100周年第一記念館(図書館・体育館棟)竣工	◆100周年第一記念館2・3階に図書館開館 ◆維軒文庫[加藤常賢名譽学長の旧蔵図書]受入れ ◆星城文庫[三島一教授の旧蔵図書]受入れ ◆関文庫[関良一教授の旧蔵図書(主に明治文学・近代詩関係)]受入れ	
1979(昭和54)		◆セルフコピーサービス開始 ◆マイクロリーダー開架閲覧室に設置	
1980(昭和55)		◆白水文庫[内田泉之助教授の旧蔵図書]受入れ	
1982(昭和57)	沼南校舎(現柏校舎)開校		◆沼南校舎1号館2階に附属図書館(分館)開館(千代田図書館から図書の一部移管)
1983(昭和58)		◆酔軒文庫[橋川時雄顧問・名譽教授の旧蔵図書]受入れ	 <p>附属図書館(分館)[昭和57年]</p>
1986(昭和61)	大学院国文学専攻に博士課程を設置	◆赤塚文庫[赤塚忠教授の旧蔵図書]受入れ	
1987(昭和62)	創立110周年記念式典挙行	◆蔵書数が10万冊を超える ◆城山文庫[浦野匡彦舎長の旧蔵図書]受入れ	
1988(昭和63)		◆『二松學舎大学附属図書館漢籍目録』 ◆『二松學舎大学附属図書館和書目録』発行 ◆『二松學舎大学附属図書館蔵逐次刊行物目録 1987年版』発行	
1990(平成2)	沼南校舎2号館竣工		
1991(平成3)	国際政治経済学部国際政治経済学科開設		
1992(平成4)	創立115周年記念式典挙行		◆政経関係の紀要・雑誌を千代田図書館から移管
1993(平成5)	沼南校舎5号館竣工		◆電動書架設置
1994(平成6)		◆図書館システム導入、図書館業務の電算化始まる	◆沼南校舎1号館2階から5号館2階・3階に図書館移転 ◆入退館ゲートシステム導入
1995(平成7)	大学院昼夜開講制導入	◆閉館時間を17:30から21:15に変更	
1996(平成8)			◆視覚機器導入 ◆閉館時間を17:00から18:30に変更
1997(平成9)	創立120周年記念式典挙行	◆「季報」66号を刊行後、休刊	
1998(平成10)		◆泥卿文庫[伊藤漱平学長の旧蔵図書]受入れ	
1999(平成11)		◆図書館システムによる貸出開始 ◆鎌田・内田文庫[鎌田廣夫教授・内田和氏からの寄贈]受入れ ◆『二松學舎大学泥卿文庫書籍目録』発行	

2000 (平成 12)		◆千代田区立図書館と相互協力を開始し、千代田区民に開放	◆蔵書数が 10 万冊を超える
2001 (平成 13)	大学院国際政治経済学研究所開設	◆『二松學舎大学附属図書館漢籍目録 (増補編)』発行	◆沼南町中央公民館と相互協力(館内閲覧・複写サービスのみ)を開始し、沼南町民に開放(～2005年4月)
2002 (平成 14)	九段校舎建替えのため、全学柏校舎へ創立 125 周年記念式典挙行	◆インターネット上で両館共通の蔵書検索サービスを開始	
2003 (平成 15)			◆水木かおる記念文庫「水木かおる氏(専門学校 17 回卒)の旧蔵資料」受入れ
2004 (平成 16)	九段キャンパス(九段 1・2 号館)竣工 大学資料展示室を 2 号館 1 階に開設	◆九段 1 号館地下 1 階・2 階に図書館開設 ◆貴重書庫設置 ◆電動書架設置 ◆退館ゲートシステム導入	
2005 (平成 17)		◆入館ゲートシステム導入 ◆閉館時間を 21:15 から 21:00 に変更 ◆貴重資料のデジタル化開始	◆「水木かおるコーナー」開設 ◆閉館時間を 18:30 から 19:00 に変更
2006 (平成 18)		◆ブックポスト設置 ◆図書館(九段)と(柏)間の相互貸借サービス開始 ◆データベース導入	◆ブックポスト設置 ◆千葉県東葛地区大学図書館コンソーシアム(TULC)(麗澤大学・日本橋学園大学(現:開智国際大学)・中央学院大学・川村学園女子大学・東洋学園大学・江戸川大学)に参加
2007 (平成 19)	創立 130 周年記念式典挙行 文学部に図書館司書課程設置	◆「季報」復刊(67号) ◆閉館時間を 21:00 から 21:30 に変更 ◆学生用カラーコピー機設置 ◆九段校舎受入のバックナンバー紀要を柏校舎保存書庫へ移動 ◆横溝正史旧蔵資料受入れ ◆電子ジャーナル・データベースサービス開始	◆柏市立図書館と相互協力を開始し、柏市民に開放 ◆閉館時間を 19:00 から 18:55 に変更 ◆附属沼南(現柏)高校生の利用開始
2008 (平成 20)		◆開館時間を 9:20 から 9:00 に変更	◆講演会「父・横溝正史を語る」横溝亮一氏
2009 (平成 21)	大学九段 3 号館竣工	◆私立大学図書館コンソーシアム(PULC)に加盟	◆講演会「平安朝の恋歌」山崎正伸文学部教授 ◆情報検索講習会開始(～2011年まで)
2010 (平成 22)		◆閉館時間を 21:30 から 21:50 に変更 ◆情報検索講習会開始 ◆雑誌データベース入力作業開始 ◆『学校法人二松學舎所蔵資料目録』発行	◆講演会「作家の誕生」五井信文学部教授 ◆「水木かおる記念文庫だより」創刊
2011 (平成 23)		◆別館ブックラウンジ開設(～2015年6月) ◆大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)に加盟	◆講演会「関東大震災と『白樺』-1923年の武者小路実篤・有島武郎・志賀直哉-」瀧田浩文学部教授 ◆附属柏中学生の利用開始
2012 (平成 24)	創立 135 周年記念式典挙行	◆図書館業務委託開始 ◆閉館時間を 9:00 から 8:40 に変更 ◆休業期間中のレイトデー開始	◆図書館業務委託開始 ◆講演会「スポーツと健康」金子茂国際政治経済学部教授 ◆柏市立図書館・市内 4 大学図書館(東京大学・麗澤大学・日本橋学園大学・本学)ビブリオバトル開始 本学学生奨励賞受賞 ◆閉館時間を 18:55 から 18:00 に変更 ◆柏市内の中学生の職場体験実施
2013 (平成 25)	全学部の授業を九段キャンパスで開講	◆オープンキャンパスにて、本学の学生によるビブリオバトル開始 ◆学習支援用 PC 設置 ◆選書ツアー、「レポート・論文の書き方」ワークショップ開始 ◆『三島中洲と近代 其一』発行 ◆講演会「直筆原稿を読む楽しみ-横溝正史を中心に-」山口直孝文学部教授	◆講演会「論語-現代に生きる孔子と門人の言葉-」牧角悦子文学部教授 ◆柏市立図書館・市内 4 大学図書館 ビブリオバトル開催 本学学生奨励賞受賞 ◆閉館時間を 18:00 から 16:30 に変更
2014 (平成 26)	大学資料展示室を 1 号館地下 3 階に移設 大学九段 4 号館竣工	◆デジタル画像コレクションをホームページで公開開始 ◆電子書籍サービス開始 ◆『三島中洲と近代 其二』発行 ◆講演会「幕末維新期の儒者たち」宮地正人東京大学名誉教授	◆講演会「森鷗外が描いた幕末明治の医者たち」町泉寿郎文学部教授 ◆柏市立図書館・市内 4 大学図書館 ビブリオバトル開催 本学学生奨励賞受賞
2015 (平成 27)	大学九段 2 号館にラーニング・commons 設置	◆蔵書数が 20 万冊を超える ◆二松學舎大学学術情報リポジトリ公開 ◆『三島中洲と近代 其三』発行 ◆『芳野金陵と幕末日本の儒学』発行 ◆講演会「三島中洲における漢洋折衷のバランス感覚-松陰・安齋・榮一との比較-」陶徳民関西大学教授	◆講演会「芳野金陵と幕末日本の儒学」町泉寿郎文学部教授 ◆柏市立図書館・市内 4 大学図書館 ビブリオバトル開催 本学学生チャンプ本賞受賞
2016 (平成 28)		◆『三島中洲と近代 其四』発行 ◆講演会「三島中洲の経学」田中正樹文学部教授	◆講演会「横溝正史ミステリーと地図」山口直孝文学部教授 ◆柏市立図書館・市内 4 大学図書館 ビブリオバトル開催 本学学生奨励賞受賞
2017 (平成 29)	創立 140 周年記念式典挙行 文学部に都市文化デザイン学科開設	◆共立女子大学・共立女子短期大学図書館と相互利用開始 ◆講演会「父 横溝正史が愛した懐かしき成城」野本瑠美氏	◆講演会「漱石作品の魅力-ことばの面白さを楽しむ-」増田裕美子文学部教授

# 二松學舎創立 140 周年記念特別展のご案内

今年は本学創立 140 周年にあたり、大学資料展示室において特別展「夏目漱石展」を始め、1 年を通じて 8 回の企画展を予定し、二松學舎のコレクションを公開しています。この秋からは、「大正天皇と二松學舎」、他 3 回の企画展を開催します。

名 称	会 期
大正天皇と二松學舎	平成 29 年 11 月 13 日 (月) ～ 11 月 25 日 (土)
三島中洲と近代 其五	〃 12 月 4 日 (月) ～ 12 月 22 日 (金)
文学散歩 作家の草稿	平成 30 年 1 月 22 日 (月) ～ 2 月 17 日 (土)
新収コレクション	〃 3 月 1 日 (木) ～ 3 月 17 日 (土)

次に 4 月から 10 月までに開催しました特別展についてご報告します。

## 特別展「夏目漱石展」[10 月 11 日 (水) ～ 10 月 24 日 (火)]



本学の創立記念日 (10 月 10 日) に合わせて開催しました「夏目漱石展」では、昨年、記者発表してテレビ・新聞等で広く報道されました「夏目漱石漢詩文屏風」、他に漱石直筆の書画「椿画並句」「墨竹三竿図」、漢詩・俳句等の作品、正岡子規宛書簡、『吾輩は猫である』『こころ』『三四郎』等の初版本を公開しました。研究者や漱石ファンの方々が 1 点 1 点時間をかけて熱心に見学されていました。

### 「横溝正史の世界」展 [4 月 17 日 (月) ～ 5 月 13 日 (土)]



横溝正史の自筆原稿や蔵書を展示しました。会期中の 5 月 6 日 (土) には、横溝正史のご息女の野本瑠美氏による講演「父 横溝正史が愛した成城」を実施しました。

### 「二松學舎に学んだ名士たち」展 [6 月 1 日 (木) ～ 6 月 24 日 (土)]



中江兆民・犬養毅・嘉納治五郎等 49 名の卒業生に関連する資料を展示しました。6 月 16 日 (金) には「私学経営研究会」の方々が見学され、会場にてギャラリートークを実施しました。

### 「二松學舎の書道」展 [7 月 10 日 (月) ～ 8 月 10 日 (木)]



本学を卒業した比田井天来・田代秋鶴・上田桑鳩・鈴木翠軒等近代日本の書道に影響を与えた人物の作品や、本学の教壇に立った教授の作品を展示しました。7 月 16 日と 8 月 6 日のオープンキャンパスで多くの高校生が見学されました。

### 「和本の世界 奈良絵本等」展 [9 月 4 日 (月) ～ 9 月 23 日 (土)]



今年 3 月に出版された『武士が活躍しはじめた、その頃のお話』(磯水絵副学長・小井戸守敏教授[大妻女子大学]・小山聡子教授編)に用いられた奈良絵本『保元物語』『平治物語』や、『咸陽宮』『住吉物語』など和本の展示を行いました。

# 本学教職員著書紹介

## 『浄土真宗とは何か——親鸞の教えとその系譜』

小山聡子 著  
(中央公論新社(中公新書)、2017年1月25日発行)  
新書版・272頁・860円+税 ISBN: 9784121024169



本書は、2013年に上梓した研究書『親鸞の信仰と呪術—病氣治療と臨終行儀』(吉川弘文館)をもとに、歴史学の視点から著した一般読者向けの新書である。本書では、病氣治療と臨終行儀を中心に、親鸞以前の平安仏教について論じた上で、法然、法然弟子の隆寛、津戸三郎為守、証空、さらには親鸞、親鸞の妻恵信尼、長男善鸞、末娘覚信尼、孫覚恵、曾孫覚如、玄孫存覚、浄土真宗教団を確立した蓮如の信仰について論じた。

現在存続している宗教教団で重要視される歴史上の人物は、往々にして理想化して語られがちである。しかしそれでは彼らの真の姿を描き出すことなどできない。本書では、歴史学の立場から史料の厳密な考証のもとに、努めて先入観を排したうえで、理想化された姿ではなく、等身大の姿を描きだそうと試みた。

それによって本書では、親鸞の言説に矛盾がある点や、親鸞でさえ自力の行為をしてしまうなど、他力信心を得ることを難解だと考え苦悩していた点を明らかにした。親鸞が東国から帰京したのち、東国の門弟らの中で多くの異義が発生した。これまでその原因は、門弟らの能力不足と見なされてきたが、親鸞の側にも問題があったことを明らかにした。本書では、親鸞の家族について、彼らが必ずしも他力信心にこだわりはせず、呪術行為をも頼みにするなど、自力信仰と決別してはいなかったことも明らかにした。この点は、親鸞の教えを正しく継承していると主張した子孫覚如や蓮如も同様である。彼らは、親鸞の教えを理解して門弟向けに他力信心について著作で説きつつも、それと同じ信仰を持っていたとはいえないのである。

本書は、従来の親鸞研究や浄土真宗研究を「更新」する内容を多く盛り込んだ新書となっている。歴史や文化、宗教に興味がある人には、目から鱗だと思ってもらえることも多いはずなので、ぜひ読んでもらいたい。

(文学部国文学科 教授 小山聡子)

## 障害者運動の「思想史」を編む

## 『差別されてる自覚はあるか——横田弘と青い芝の会「行動綱領」』

荒井裕樹 著  
(現代書館、2017年1月25日発行)  
B6版・300頁・2,200円+税 ISBN: 9784768435526



今年1月、『差別されてる自覚はあるか——横田弘と青い芝の会「行動綱領」』(現代書館)という本を上梓しました。1970～80年代を中心に活躍した運動家・横田弘氏(日本脳性マヒ者協会「青い芝の会」神奈川県連合会)の人生と思想について考えた本です。

横田氏は、「伝説の障害者運動家」と評される人物。彼が起草した障害者運動のテーゼ「われらかく行動する」(以下「行動綱領」)は、かつて、いまも、障害者運動に関わる人に多大な影響を与えています。

この「行動綱領」の中で横田氏は、「われらは愛と正義を否定する」と宣言しています。これは当時、障害者に対する差別問題は「愛と正義」で乗り越えられるはずだと信じていた人たちに衝撃を与えました。横田氏に言わせれば、「健全者」からの一方的な「愛と正義」は、障害者への抑圧に他ならない。障害者差別は「愛と正義」の顔をして近づいてくる。そこを撃たなければならない、ということだったのだらうと思います。

「青い芝の会」は、このテーゼの鮮烈さに加え、数々の「実力行使」を行いました。時には、車椅子の乗車を拒否したバス会社に抗議するために、大勢の車椅子でバスに乗り込み、運行をストップさせたこともあります(「川崎バス闘争」1977年)。

しかし、大切なのは、その「過激さ」の底にあるものを見つめることです。彼らがなぜ、そのような行動を取らなければならなかったのか。彼らは、何を守ろうとして、闘っていたのか。

障害者運動の研究というと、福祉制度の歴史や、支援事業の沿革が中心的に採り上げられる傾向にあります。しかし、私が興味を持っているのは、そういった運動に身を投じた人たちの底に、何が潜んでいたのか、という点です。一人一人の運動家の言葉から、そういった「人間を突き動かす衝動」を読み解いていくこと。それが自分のライフワークだと思っています。

(文学部国文学科 専任講師 荒井裕樹)

# 本学教職員著書紹介

松本健太郎ゼミナールの学生有志による出版プロジェクト

## 『メディアをつくって社会をデザインする仕事』

——プロジェクトの種を求めて』

大塚泰造・松本健太郎 監修

山崎裕行・柴田拓樹・田中友大・加藤興己・木本伸之・白土智之・大工綾乃 編

(ナカニシヤ出版、2017年5月15日発行)

四六判・170頁・1900円+税 ISBN: 9784779510656



現代的なメディア社会の組成をよりよく把握するためには、ときに「理論」(俯瞰し分析するプロセス)だけでなく、「実践」(体験し制作するプロセス)が重要となる。これまで、松本ゼミナールでは沖縄県や岡山県を舞台として、また、映画制作や体感型ゲーム制作を目的として、地域社会との紐帯(あるいは、ひろい意味での「メディア」)を形成するようなイベントを数おおく実践してきた。これは、いわゆるPBL(Project-based learning)、すなわちジェネリックスキルの涵養を目的とするプロジェクト型の学びであり、今回とりあげる書籍『メディアをつくって社会をデザインする仕事—プロジェクトの種を求めて』(ナカニシヤ出版)もその一環として、学生たちの編集によって刊行されたものである。

急速に変容しつつあるメディア社会の「今」を把握するために、各分野、それも先端的な領域で「社会をデザインする仕事」をなさっている“めちゃくちゃ面白い大人たち”(リバネスの丸幸弘氏、カタリバの今村久美氏、東北食べる通信の高橋博之氏、琉球ゴールデンキングスの大塚泰造氏など…)に、学生編者たちが事前のリサーチをもとにインタビューをおこない、文字起こしをした原稿にもとづいて記事を編集し、さらに私がエッセイをつけて解説をくわえている。学生編者からインタビューへと投げかけられた質問の数々は、なんらかのメディアをつくり、それによって社会のあり方をデザインしていくための「文法」を浮きあがらせているようにも思える。

付言しておく、本書の目的は自己啓発にあるわけでも、社会事業をめぐるノウハウの集成にあるわけでもない。むしろ社会に対してさまざまなアプローチで事業を展開される方々のヴィジョンを学びながら、私たちが生きるこの世界を批判的にとらえなおし、自分と社会のそれぞれを、あるいは両者の関係性をデザインしなおすきっかけを提供することこそが目的である。結局、数十回にもおよぶ学生たちとの編集会議をへて本書は無事に出版されたが、その労力にみあう内容をそなえた、良質の本に仕上がったのではないかと自負している。

(文学部都市文化デザイン学科 准教授 松本健太郎)

### 編集後記

「季報」100号をお届けいたします。

今号は記念号として、水戸理事長・菅原学長・土屋館長をはじめ、館長経験者の先生方よりお言葉をいただきました。また過去の「季報」編集に携わった職員の方より、当時の思い出を述べていただきました。著書紹介では、3名の先生方にご紹介をいただきました。以上のご執筆いただいた各位に厚く御礼申し上げます。

図書館の歴史、また今後のあるべき図書館の姿等、多様な内容の文章を読み、過去を踏まえつつ未来の図書館をどのようにすべきかを考えさせられました。

「季報」は、二松学舎創立100周年の年に産声を上げ、今年140周年の年に節目の100号を刊行することとなりました。100号までこぎつけられましたのも、ご寄稿いただいた各先生、「季報」に携わった皆様や歴代の編集者のおかげと存じます。心より感謝申し上げます。

次号101号を無事に発行することを第一の目標として、今後も利用者と図書館の交流の場となる「季報」をお届けしていきたいと思っております。

(S・A)

二松学舎大学附属図書館 季報 第100号記念号

発行日 平成29(2017)年11月15日

発行 二松学舎大学附属図書館 九段図書館

柏図書館

印刷所

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16

〒277-8585 千葉県柏市大井2590

株式会社サンセイ 電話: 03-5227-8333

電話: 03-3263-6364

電話: 04-7191-8758